

ひまわり



令和3年11月12日(金)

地球温暖化



日本・アメリカ・イギリス・EUは2050年、中国・ロシアは60年、インドは70年、各国と地域はそれぞれの年までに、温室効果ガスの排出を実質0にする目標を示しました。温室効果ガスとは、地球温暖化の原因になっている気体のことです。水蒸気、二酸化炭素、メタン、一酸化二窒素、フロンなどです。気候変動対策の国際的枠組み「パリ協定」では、「産業革命前と比べた気温上昇を、できれば1.5℃以内に抑える」との目標があります。この実現に向け、各国と地域は取組をしなければ

なりません。

それでは、地球温暖化によって、どのような不都合が起きるのでしょうか。大きく分けて次の5つを示します。「1 海の水が増え、陸地が減る」「2 環境の変化で動物や植物が減る」「3 大雨や巨大台風の発生、逆に砂漠が増えることもある」「4 熱帯や亜熱帯地域の伝染病の範囲が広がる」「5 気候が変わることで植物の生育に影響し食物が減る」温暖化がさらに進めば、その影響は計り知れません。

今年のノーベル物理学賞を受賞した 真鍋淑郎（まなべ しゅくろう）氏は、1969年に気候変動を予測する革新的な計算方法を開発しました。その後も研究は進められ、89年には大気中の二酸化炭素濃度と地球温暖化の関係を、世界で初めて科学的に示しました。現在の地球温暖化の研究でも、この成果が基礎となり進められています。コンピュータの計算速度が飛躍的に向上したこともあり、さまざまな気候変動シミュレーションが行われています。今年8月の高精度計算により、2040年には世界の平均気温が1.5℃以上上昇するとの結果が出ました。この結果は、科学の世界では衝撃的なものでした。

それでは、私たちの生活の中で、温暖化防止に協力できることはないでしょうか。実はとても簡単なことがあります。近い距離の移動は自転車や徒歩にする、こまめに電気を消す、エアコンの温度調節を控えめにする、ゴミを増やさない生活をするなどです。このようにすることで、石油や石炭などの化石燃料の消費が抑えられ、温室効果ガスの削減につながるのです。小さな積み重ねに世界中の人々が協力することが、やがては大きな結果に結びつくのです。他にもできることはあると思います。自分でも調べてみてはどうでしょうか。

余談ですが、真鍋氏はアメリカのプリンストン大学で研究を続けてきました。それは、アメリカには日本よりも良い研究環境があったからです。現在も、優秀な研究者の渡航が増加するとともに、日本に研究の場を求める海外の研究者はほとんどいません。これを「知の空洞化」といいます。残念なことです。

学校ホームページで、日々の教育活動のようすを公開しています。どうぞ、本校ホームページを閲覧してください。
【東住吉中学校】で検索



QR code

東住吉中学校HP → <http://swa.city-osaka.ed.jp/swas/index.php?id=j742691>